

大日本國開闢由來記

卷三

13
2697
4



18
2697
4



日本國開闢由來記卷三

指漏魚者 編

太祖東征の功績に依り天業を宇内にお恢弘

背み日神の威を負り影を随て賊虜を壓躡

神武天皇と神日本磐余彦天皇と稱す彦波瀲武鸕鷀草葺不合命の
弟四の御子なり母と玉依姫とまを我邦の太古神も人も皆私的情
なけしむ必兄を以て世を嗣ことせむ唯其徳の優りのを撰ぶ故に
兄五瀬命稻飯命三毛野命を置く立て太子となりまふ天皇生みけり
あつ明達意確如しゆも長となりまふ日向國吾田の邑吾平津
媛を娶り妃となす手研月命を生み年四十五歳ありまふ時

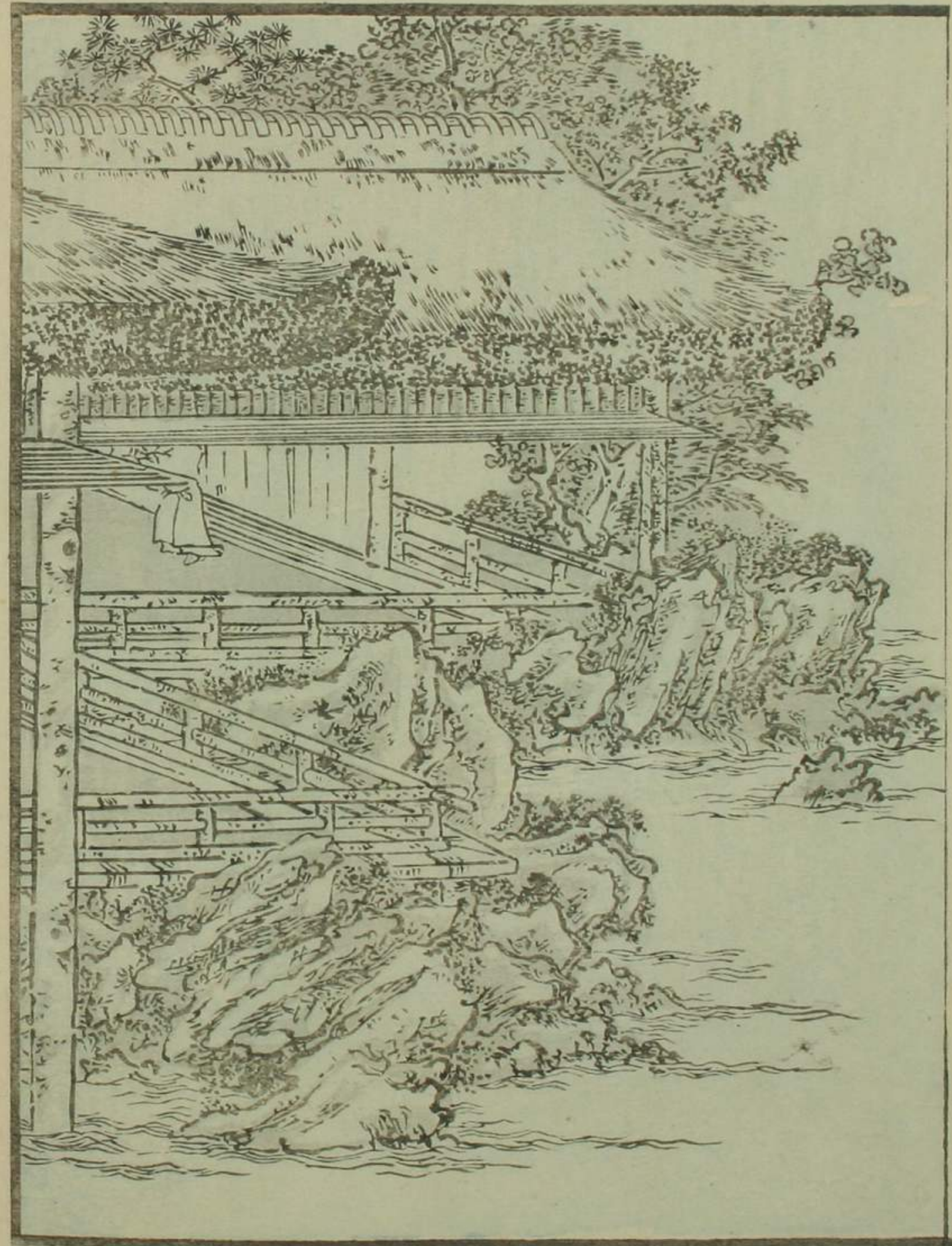


其兄五瀬命等と。御子手研耳命と高千穂の宮に坐し相議さす。此日向國の邊僻あり王化を普く天下に及ぶ便宜よわく何の地も遷る。大業を成就せん。昔我天神高皇產靈尊と大日靈尊此豊葦原の瑞穂國を我天祖彥火瓊杵尊に授けし。是に於て彥火瓊杵尊天の磐坐を離き五百重の雲を排闥き御前を馳蹕し此土に戻止たまひ。運鴻荒の屬時ハ草昧の鍾ぬを唯其屯蒙たるまけ。淳素なる風俗に隨ひ唯專一に正直の道を養ひ。此西偏に在て世を治めたまひ。我皇祖皇考のつとも神聖なり。ゆへ慶を積暉を重て多の年所を歴する。天祖の此邦に降跡さすひてより以來今も速く二千四百七十餘歳るれども遠邈ある地ハ猶いまも王化の德澤に霑す村落不

各自君長ありと稱す。心より疆界を分て相互に凌燥の多うして治難し。昔吾塩土の老翁に聽たることあり。此日向國より東の方に當て青山四方に環回す。山河の風光擅美き美地あり。其中ハ天の磐船に乗て天上より飛下し者ありといふ。吾謂ふ彼地ハ天業を恢弘す。天下を光宅とす。これ可き地なり。蓋六合の中心なるを。厥飛降しといふ。察ふ是必饒速日なる。彼天の神に御祖の詔を稟て大虚空を翔行ふの郷を巡視す。河内の國河上の峰に天降て。倭國鳥見の白庭山に遷居と聽まふ。是走らるる。故に吾もまた此地に就く都す。なかりあり。其の議如何と詔す。諸兄及皇子も僉曰く。詔の旨一に理實灼然なむ。臣等も恒に其事を念ぬることあり。速く行ふとと答奉ける。是に於て太歲

甲寅ふ當り冬十月五日、我装成整々れば、天皇親諸兄及皇子、帥東出
て豊後國速吸の水門に到り、中一時、一箇の漁人の艇に乗て來り。依り
粟の忌部の首の祖天の日鷲命を遣て、ことを見せしめ、なまふ、多て還
來て復命せしむ。彼此國の主あり、名を珍彦とせしむ。答りしに、召率て
來たりとて、御前に見えしむ。珍彦、天皇、白の臣に、此海灣は魚を釣て居り、が
天神の御子の來り、まふと聞て、故に迎奉んと思て、ところ、御使を賜り、速に
参りしとせしむ。けきを、天皇問ひ、然らば、汝を委く、海陸の路を知らん。
我為に導仕んやとあり、けし、疾に領掌し、たりしに、天皇の勅あり。珍彦
は推橋の末を授け、そとを捕せり。皇船に牽納せしむ。以て海路の導者
となり、さまを、われよりて、名を賜、推根津彦とぞ呼し、めたまり。これ即、倭の

直部等、始の祖あり。其處より行きて、筑紫國菟狹に到り、此地今、豊
前國の郡とあり。みろ菟狹の國造の祖、彌を兄に、菟狹津彦とあり。妹を
菟狹津媛とあり。兩人の者、りりて、天皇を迎奉り。菟狹の川上、一柱、騰官
を造り、其處、入奉り。饗膳を奉り。みの一柱、騰とあり。今、その造構の、ま
はかりあり。一方、宇佐川の岸あり、山趾に、治り、建たるが、一方、川に、臨り、流
の中、大なる柱、唯一つを建り、支さるるなり。そとを、川の方より
視ると、川の中、建たる柱、の、高く、騰り、とせしむ。一柱、騰官とあり。い
たるなり。今、宇佐八幡宮の西、驛館川とあり。その水源、大なる
石の穴を穿ち、その多く、残るあり。土人、其舊跡ありといひ傳り。柱を
足といふこと。後の世、も、左右、四柱の門を、四足門とあり。例なるなり。



漢土の一柱觀。或ハ木履觀をいふ。其の製造不類似
たるものあやあつけん。天皇其妹菟狹津媛を愛たまひく。侍臣ある
天兒屋命の孫天の押雲命の子。天種子命の妻。命をひかり。天
種子命ハ是中臣氏の遠祖なり。十一月九日。天皇筑前國恩賀郡の崗水
門に到る。十二月廿七日。安藝國埃宮に到る。其の處ハ安藝國安藝
郡。府中の總社とく。今もやうに進雄命。大己貴命。神武天皇三座を祭
るを土人傳て太古の埃宮は舊跡なりといふ。乙卯年春三月六日。吉備
國より徙たまひ。此ハ行宮を造く居たまひたまふ。其の吉備國ハ後不別備前
備中備後とす。天皇の坐せ。高島宮といふ。備中國ハ其舊跡とく
今もなや残る。此もく軍艦を造り。兵食を蓄。以て一舉天を下す

神策の如く虜ハ必自敗んこと必定ならん。邊軍中ハ令を下して且停と
復進あとなるといひて。軍を引く還たまひたまふ。虜も亦敢て逼んとも
せむ。是ハ於て御軍ハ易くと草香邑白肩の津に引きて。盾を植並く
雄詰けり。其の雄詰といふハ男叫といひ。責聲を發て。敵ハ勇威を示たらん
あ。後世陣中ハ。時の聲を揚ることの初なり。此草香津ハ盾を植るあり。
其處の名を改く盾津といひ。後ハ訛く蓼津といふ。五月八日。茅渚山
城の水門あり。茅渚まてハ血沼といふ。今ハ和泉國なり。時ハ五瀨命矢
刺の苦痛大に進たまひたまふ。劍柄を握。憤激雄詰して曰く。吾ハ大丈夫あり。一
賤奴の爲ハ傷を被報じて死んこと悔。大ハ慨嘆。進んく
紀伊國名草郡の竈山といふ地あり。五瀨命ハ遂ハ軍中ハ死たまふ。天皇

大い歌歎悲哀せむひけととも。今ハ詮たさといとされた。その寛山の地の荒井
奉る。今其靈を祀る。久度山の神社といふなり。六月廿三日。名草の郡。名草邑
のいふて。名草の郷を統領せる。名草戸畔といふを誅す。牟婁郡なる狹
野といふ地を過る。熊野の神邑。後の俗に神の藏といふ。慶小到る。萬葉集に
長忌す。與麻呂が歌とく。出せら。吾くも零來る。兩の神の崎。狹野の渡。小家も
あつた。くみと。詠る。此地なる。神をみと。訓る。三輪のこら。とら。い。からん
と。古人もいひ。神の崎と三輪が寄るとも。小紀州牟婁の郡ありて。定家郷の
駒とめく。袖くら。なら。い。け。も。な。う。と。の。う。佐野の渡。歌も。熊野御幸。乃
御供あり。此古昔の實情のありのまう。る。歌を原く。て。辞を巧み。い。なり。て。
舂裁ハ大い劣る。歌あり。大和の三輪。い。あ。ら。ぶ。俱。小。混。さ。べ。く。と。論。さ。ら。ん。

この地の神藏山とく。磐石の聳て。盾の如く。なる。峯あり。土人これを磐楯と
號。天皇の磐盾の上。登り。四方を眺望。たまひ。それ。を。御軍を引。漸。し
進。たま。んと。諸軍盡く。船。小。乗。り。を。海上。暴。小。大。風。起。り。狂。瀾。跳。濤。小。皇。船
大い漂蕩。々々。皇兄。稻。飯。命。天。を。仰。て。歎。て。曰。く。嗟。乎。吾。祖。則。天。神。母。を
海神の女。たる。小。い。ら。ぶ。く。も。ぞ。小。我。を。陸。小。厄。て。な。る。復。吾。を。海。小。厄。る。や。と。言
訖。く。劍。を。拔。て。海。小。入。り。鋤。持。の。神。と。り。た。ま。ふ。ま。の。他。船。小。乗。て。新。良。貴。の。國。小
渡。り。その。國。の。王。と。なり。た。ま。ふ。と。い。ひ。り。三。毛。野。命。も。ま。の。大。小。恨。た。ま。ひ。く。吾。母。及
姨。並。小。こ。海。神。の。小。何。為。波。瀾。を。起。く。以。淮。溺。や。と。い。ひ。て。浪。を。踏。く。常。世。乃
郷。小。赴。く。ま。の。天。皇。卒。小。二。兄。を。失。た。ま。ひ。て。痛。嘆。せ。く。ま。ひ。く。い。う。あ。も。ま。を。こ
や。う。な。や。の。も。の。獨。皇。子。手。研。耳。命。と。俱。小。軍。を。帥。く。海。路。を。渉。た。ま。ひ。漸。り

熊野なる荒阪の津に皇船を泊らまひあり。荒阪の津亦の名を丹敷の浦と
もいひ。今濱の宮といふ。新宮を距ること三里許あり。六の處より陸上りたまひ
その濱の宮なる丹敷戸部といふ兎徒を誅す。これに勝たまひし。その地より
兎神ありて口より毒氣を吐く皇軍を惱めきた。人々いれ中々咸瘁ぬる不
よむ。皇軍復振がごとく。あま踏踏たり。然るに其處に彌を熊野の高倉
下といふ者あり。ある夜の夢に天照大神。武甕槌神。葦原の中つ國甚喧擾と
響の聴きた。汝往く之を平げよとのたまひければ。武甕雷神對て。臣とささりふ
行はとも。吾平國の劍を下さる。國土おのづから平なんとぞ申奉る。天照大神
實み然りとこのたまひて之を諾くまひるるといふ。武甕雷神顧て高倉下を召て。吾劍
を部靈といふ。今汝が庫の裏に置るる色の速に取くよとて天孫に獻すこと

ありければ高倉下の唯々と應ぬるとて夢に覺ふなり。六は幽顯分界とて神と人
とは通路に絶て。相視ことこのたまひ世とありける後なるを。高倉下が性慈忠
實を以て。其夢に此事を見せし。劍を下したまひるあり。高倉下の夢の様を
奇異の事におりひし。明且を待たし。速に庫を開て之を視し。果して
屋を貫て庫の底板の上にお倒れ。劍の落し立たりけし。あれを取て御陣に参
て進奉られた。天皇大に喜悅たまひあり。此刀を佐士布都神といひ。佐士布都
の御魂と名はせし。石上の神宮に在るといなり。其處より中洲の大和の國に踰る
ところの路に嶮峻。嶮紀く。毎分行るる方も知難く。外への路もあらず
きた。諸軍いりて此山を跋陟んやと。志を樓違ふ。其處に日暮あり。あ
天皇も六の事を深く憂へたまひし。や睡たまひ。其夜の御夢に天照大神

の詔み。朕今頭八咫鳥を遣て郷導と為んとこのまひり。夜明く空を
視たまへを果して夥き鴉の尋常のより大なるが虚空より翔り降るを。
天皇御覽して此鳥の來出と。かのぼりら祥夢み合ひ。大哉赫矣。我皇祖天照大
神の基業を助成さしめよと有難さふ。いざや此鳥の行ふに従ふ軍を
遣さく。急ふ命を傳て。先大伴氏の遠祖日臣命。大來目の督將元戎を帥しめ
る。山を踏啓て行ふ。其鳥の向ふを尋て仰視てこれを追く驅り。遂に菟田の
下縣に達到。ある傳ふ神魂命の孫。鴨建須見命。大鳥と化す。翔飛で導奉
て。中洲小達しつた。天皇その功を喜て。厚く褒賞しなせしめり。其後
八咫鳥の社を。大和國宇太郡置高角の神社といひ。今いふ色を乎。登古路須社
といふ。いふ乃建須見命を祀奉しなりともり。時日臣命の功を譽たせしむ。

汝の忠りて且勇加能導の功あれ。今よま汝が名を改く道の臣といへり。と
勅ありけり。皇軍を。丹敷の浦より伊勢の國なる大杉谷へ超く。吉野の
河尻に到り。まはれ小笠原作ら魚をとるのあり。天皇立ち上り。汝を誰
ぞと問ふまひり。を僕は是苞苴持の子なりと答。直小飯順まらをり。と
此の阿陀の鷄養部が遠祖なり。其地より幸行吉野首等。祖井氷鹿とい
者と吉野の國葉が祖の石押分の子なりと追ひ参迎く。従奉る今も吉野
川に浴く。南國柘村といふありて。其邊七箇村をどく。國柘莊といふあり。其地
より踏穿越く。宇陀に幸せり。なれふより。其幸しり。とて
菟田の穿邑といふなり。秋八月二日。天皇人を使さく。兄猾及弟猾を以て
ののを徴しむ。六の兩人。菟田縣の魁師なり。六の兄弟といふ。この大國主

神の八十神の如く。同系よを別て。従兄弟再従三従兄弟となりても。その兄の家
と兄といひ弟の家と弟といひつゝ如く。唯同族と呼ぶものともえたり。その兄猶へ
召し應せむ。弟猶を御使と俱し軍門に詣りて。天皇を拜し奉る。且竊り
告奉へ臣の兄猶が逆状を為し。天孫到たまふと聞け。兵を起て襲奉んと
せしとも。皇師の威を望見し。大に懼敢て敵し奉り難きことをいひ。つゝ
潛し其兵器を伏匿し。新し宮殿を造り。その殿の裏に押機を施す。御饗
小事よせむ。その中に入奉る。壓殺奉んとす。欺謀を為し。城聞ぬれば。速
し行く。さほぐし諫争し。のども。更し兼諾を止むを得ず。六の事と
懇しとすなり。善くわが備となり。たまふとを言上あつらふ。天皇は
聽し。道臣命を初め。其反逆の状を察せしめ。たゞひくれば。道臣命

往く。ふを鑿て。その賊害奉んとす。奸謀あることを審み知り。たまふ。
大に怒て詰責し。曰。虜爾が造ところの屋に。爾居とく。剣と按弓を彎。逼催
て。追入る。兄猶の恐懼狼狽す。遂し其新室に入。過てその機を踏。押
し。壓し。撃れ。死す。その屍を引出し。寸断し。斬り。つゝ。血を流し。地を
浸る。ふより。其處を踏。菟田の血原といひ。弟猶の鯨肉と酒とを齋し
來る。軍士を勞饗けし。天皇其酒肉を軍卒に。斑賜て。御歌を詠せ
たまふ。その御歌は。

菟田の田垣に。離羅設。我待や。離々障らず。勇妙し。鯨障。前妻が魚
乞さば。立抗稜の肉の長けく。幾許が。聶孫。後妻が。魚乞さば。拾實乃
大けく。幾許。陀聶孫。を。神世より。漸人の世と。ま。し。

公家ありて
 唯古海の
 國にあり
 かのまき
 拾遺下賀
 縣主遠祖
 心向者本
 田之國の
 人馬は
 ちかき
 ちかき
 本記せ
 本記せ
 本記せ
 本記せ
 本記せ
 本記せ



卷三

十一

我邦の太古
 陰謀横暴
 行わむ者
 峻大時
 光狂群賊
 主新秋
 主新秋
 土蜘蛛の
 りひが如
 この足場
 必馬あ
 日臣令
 導の敷
 替りの
 りひが如
 どの書
 大の馬
 手ひが如

八咫鳥
 軍士と
 導く
 山路を
 踰る處



前後の歌の意も詞もや異なることあるを。後の世は意を以て倉平
小了解難きといふも多々れどよく韻味を。我邦上古淳樸質實
ありて毫も縁飾なく。眞實なることこの性情の。其中小自見まじく。言
外の深意ありのなり。六の御歌の大意を畧し釋を。先この歌乃初句
倭のといふ四字一句脱するなり。説あり。左もあるなり。歌の意
々。倭の菟田の田垣と。田の圍小垣を結構たる處。籬を捕んとく
罾を張るなり。鳴の障掛りせむ。思もよるぬ鯨が掛たるぞと。弟猶が
齋來し鯨を覽たまひ。兄猶が天皇を弑奉んとく。設たる機。自己が
壓して死たるとを譬たまひ。このなり。そとより下ふ其譬
喩の意なき。軍士の妻妾など魚を乞わらば。此鯨肉の長く大

わのを幾許も聶みして多く與よと詠たまふ。立机後と伊杵木へ。
實とのうまの發語あり。木の實を魚の肉のひけり。そとより
歌ふあはれ何小何。その物の稱といふなり。此發語を先言て後その
事り及ぶを。我邦上古の習あり。畢竟へ人の心の寛舒なることなり
出るのなり。此御歌の御詞。諸卒の妻妾までも愛惠たまひの
御意。自知とくふ不ゆるを。前後ともみたるを。譬喩と。後世の
慮なるなり。

第五 志必克不在く軍將ろ戦勝く自誇者を誡む
鏡速日よく天人は際を知衆を率く歸順

九月五日。天皇菟田の高倉山の巔不陟たまひく。域中を瞻望たまふ。伊賀

村の上は方ふ伊勢伊賀兩國に跨る。高く聳たる國見岳とゆう山あり。其處
み八十梟帥とて稀勇なる兇漢が。數多の黨與を召集く立籠り。女阪
女軍を置。男阪も男軍を置。墨阪も炭火を設く備を堅ら。夫も女阪とい
へ。宇陀郡宮奥村の西あり。十市郡の界なり。男阪といひ。宇陀郡半阪
村の西あり。城上郡乃界なり。男阪女阪といひ。後世の追手搦手のこと
ふく軍士は勇壯。そのを選く。追手も屯させ。其餘を搦手の方へ使
守らしむ。そを男軍女軍といひ。男女のことをいひあはせ。炭阪
とて炭を阪に道に積置し。敵寄來らば。其炭を燃して之を遮ん。乃
設なり。此處へ宇陀郡萩原村の西あり。本へ炭阪なり。その文字
を轉る。今墨阪と呼ぶなり。其他十市郡の磐余邑も。兄磯城等軍

充満して。天皇の御軍寄來らば。拒戦と待構ら。その屬賊の據るところ
いづれも皆要害の地あり。道路險絶。卒に往通なき方あり。終に
いづれも智略驍勇者あり。容易攻入なきやうなり。とせん。そのこの
八十梟帥といひ。其處此處小黨を結く住居。或は山岳に大室など。整土
を築。城郭を構。殘暴兇勇は徒を多く集て。人民を惱む。蜘蛛の網を張て
飛ゆく蟲を取ら。如くわらる者ども。時の人呼て土蜘蛛といひ。八十の大數
をいひ。其一群は七八十の數に餘る。梟帥なり。八十梟帥といひ。あ
一人の名ふあしきなるなり。されど天皇も毫も屈滞とま。御情は。唯土
卒を多く損。之を征平せんことをおぼして。先その首魁なる國見岳
の八十梟帥を伐んと兵を勅く出たまふ。その御志も必克んとて。存て御歌

と詠せたまふ。その御歌よ。

神風の伊勢は海の大石ふや。の蔓延廻る。細螺子の吾子よ。細螺子の
の蔓延廻る。撃つ息ん。御歌の意へ先小熊野を經る。伊勢の海は
界をる錦の浦乃邊もせも巡幸。たまひ。其慶あ。海岸をる
大石ふ細螺子の多く匍匐廻るを御覽ありたるを今可念出させ
たまひ。梟帥ども師を。大石小夥く纏はさたるが如く
わらをも一舉ふ打滅せよ。その意を譬たまひ。將卒を親とて
吾子どもらよ。皆然思ひ。されど夥き細螺子の如く。數多
の虜賊なま。小敵なり。と侮ふとなれ。諸軍の心を勵。このまへ
なり。

さの餘黨たる繁々。其情も。豫測。強。力戦を好ま。たま
え。密小道の臣に命を救。汝速小大来日部。率たる。士卒を
帥。大室を忍阪の邑に造せ。宴饗を設。虜賊を誘導。之を殺せ。や
勅あり。道臣命。速。其密旨を得。虜小虚襟。其情を通
。忍阪の儲侍。旨をい。虜賊。蠢思。我小
陰謀あること。汝知。遂に誑贖され。盡く集會ける。此方。俄小大室
を造りて。後道臣命。猛卒を選出。陰小軍士。期て曰く。酒酣。ならん
ころ。吾則起。歌。舞。時汝等吾歌の聲を暗令。意得。
期。過。一時。起。虜を刺殺。と示。坐定。酒を行。小虜ら
情。任。恣。醉。と。道臣命。起。歌。る。歌。

忍阪の大室屋ふ人多し。來入居ども。瑞し。來目の子ら。我頭推い石
槌の持撃てし止ん。○この歌の意。頭推石槌の皆太古の劍
名の。頭と。今も俗ふるあるなど。のなる如く。頭のとめ。劍
の頭をひ石槌と。其頭を石と造るものをつくる。性歳大和
の三輪あり。劍の頭を石と。槌の如く造るを掘出せしとなり。
人多く此所を集居るあり。とを別く久米部の帥と久米の子らよ。
えやくそは佩たる劍あり。虜どもを刺殺せし。今がそは撃てし時なる
ぞや。諸卒み下知せしなり。瑞し。久米といえん。その發語なり。

諸卒此歌を聴より。速く起り俱に其劍を拔く。一時に刺殺たり。○
此大室に集たる虜の喙類。盡く殺す。道得たるものなり。皇軍大

悦く。天を仰て大に咲ふ。その時道臣命を再うする歌。

今者豫々々々。阿々朝咲今ふも。吾子よく。○歌の意。虜の心浅く
し。誑しぬること可笑し。まこと意くあることよ。今とまをわく盡く殺
す。吾子等の功を稱嘆す。阿々朝咲と咲堂朝咲大笑し。歌はなり。
後の世久米舞の時。此歌をといひ。後大に笑へ。此故事の遺れる
かりといふなり。

道臣命を再うする歌を曰く。

虜を一人百人人々言ども。手對りせど。○歌乃意を。虜等が自己一人
を以て百人に當るといふも。我に敵當者一人もなきて。皆殺されたる
こと。其辞ふも似ぬ。怯きこと。ひく。戲謔なり。

天皇此等の歌を聴しめし。軍將士卒は歌を侮誇を御覽して詔し戦
勝る驕ふとなさし良將の行なり。今蟲身小比と小賊を撃得たりと也。
漫不誇こと最誠をきこととこのまひなり。後世の諺も勝て樂敷乃
紐を固詰といふ語也。此聖訓の遺意も。實小國を開業を創しその
御志の天理も出るを以て必克んものとおもはれ故も克てなり自誇といふ
を誠をすべし。有難き御事なり。天皇再のまはく。今魁賊を比したりと也。
同惡者其黨與匈々りのちろ十數群ありて。其情いまだ計易きを如何と
一處も止居く。以て變を制するとならうんやとのまひく。陣營を別處小
伎とすひたり。冬十一月七日。皇師大舉て。磯城彦を攻んとす。先使者を
遣く。兄磯城を徵せ。兄磯城命を兼さるを以て。再頭八咫鳥を遣く。之を召

す。頭八咫鳥といふ。建角身命のまをいふなり。頭八咫鳥。其營り到く。天
神の御子汝を召す。怡井参る。といひるまを。兄磯城念く。天の壓伸到
と聞く。吾あれを慨憤かりひるふ。奈何ぞや自夸慢く。吾を招かといひ
て弓を彎くまを射んとす。即ち避去る。兄磯城が宅も往く。
前の如く勅命は音を速くまを。弟磯城も。慄然と容を改て禮を為て臣天
壓命到たまふと聞く。且夕も畏懼し。御使を賜く参るとあるまとの身も
餘り喜しといひ。頭八咫鳥を厚く食饗て後。俱も詣到く告て曰。臣兄
磯城。天神の子來し。まを聞く。八十梟師を聚。兵甲を具て與も戦を決せ
んとしひけまを。臣もまを諫まるとも聞がれ。止ことを得。獨到詣て告奉
り。早くまを圖とまへとを申ける。まをまよりて天皇。諸將を會て問ま

今兄磯城果々逆意あつた。いづれお招とも来り。如何に善うらん。各
異見あり。申すと詔々。諸將答ふ。兄磯城執強ありとも。再
城を遣く曉諭たす。兄倉下。弟倉下。弟磯城。て説示
いば。も帰順奉さうん。さあ至る。兵を奉て。お臨たす。んところ
も。い。と。申け。天皇のより。寛仁大度。お申し。け。を
實入り。諾たす。乃弟磯城を御使。て遣され。さほぐ。お利害を
開示。や。兄磯城。兜捨。て。拙計を固守。て。肯く。兼伏奉。を。れ。は
是。於。推根津。彦謀。て。曰。今先我弱兵を遣。忍阪の道。より。出。を
を。虜。の。を。視。必。銳。卒。を。尽。我軍。お。赴。ん。その時。吾。の。勁。卒。を。馳
馳。直。お。墨。阪。を。登。行。菟。田。の。水。を。取。う。れ。が。赫。炭。お。灌。て。其。火。を。消。す。

倏忽の間。お。不意。お。出。之。を。破。ん。と。必。定。を。う。と。い。ひ。け。は。天皇。その。策
を。善。く。た。ま。ひ。先。弱。兵。を。出。て。お。れ。お。臨。め。た。ま。お。虜。を。果。く。
大。兵。の。到。ぬ。と。お。り。ひ。を。獲。た。衆。を。盡。く。此。手。に。向。ひ。力。の。限。防。ん。と。を
待。構。る。皇。軍。の。と。う。に。攻。め。を。必。取。戦。に。必。勝。と。い。へ。と。も。う。ち。續。く。戦。争
お。介。曹。の。士。も。や。疲。弊。く。氣。色。を。さ。お。あ。ひ。天皇。神。速。も。其。状態。を
察。し。お。ま。ひ。を。御。歌。い。ひ。將。士。の。心。を。慰。な。す。その。御。歌。お。
盾。列。く。伊。那。瑤。の。山。は。木。間。より。い。行。守。ひ。戦。を。我。の。帆。鳥。津
鳥。鷓。養。が。徒。も。今。助。來。ね。〇。お。は。御。歌。の。意。を。菟。田。の。郡。の。伊。那。瑤
の。山。乃。樹。の。間。を。分。く。此。處。を。来。く。戦。し。こと。な。れ。衆。軍。悉。饑。疲
た。ら。ん。が。豫。く。約。束。し。お。きた。る。と。を。う。さ。へ。程。お。く。鷓。養。部。が。兵。食。を



金色の
靈鷲
飛来
天皇の
弓射止
光と故の所

齊来。軍士を饗應し。我を助んりのぞ。然らざる暫の間。事なれば。忍
堪く待よ。加し。聊士卒の心を慰む。ひしなり。盾並の盾を並
み。箭を射し。射し。嶋津鳥へ。鷄とのめ。例の發語あり。
虜への弱兵。此出るを視。果して推根津彦が謀し。おと。勢を畢し。て
あし。小對し。勇兵を墨阪の方へ廻し。後より夾撃。あざりたり。虜の
意の外。出たるま。とま。大。周章。躁擾。衆軍。忽敗走。遂し。其
梟師。兄磯城を捕。あし。を殺て。平げ。さ。ひ。り。十二月四日。皇師。長髓彦
を撃。あ。の。長髓彦。が。軍。強。く。し。卒に。破。難。く。勝。と。取。こ。能。ざ。り。天
忽。小。陰。く。雲。起。と。え。る。小。風。暴。く。氷。雨。降。出。し。空。の。色。朦。昧。あり
たる。中。より。金。色。の。靈。鷄。飛。来。て。皇。の。弓。弭。の。上。止。く。其。光。曄。熅。たる

恰も閃電の如くたり。長髓彦が軍卒皆迷敗。復力戦こと能はず。
大。小。辟。易。し。たり。衆。軍。奇。異。の。思。を。為。し。ける。この。長。髓。彦。の。う。り。
り。これ。邑。の。名。なり。その。處。に。住。る。兇。賊。の。名。と。なり。し。り。然。る。あ
中古。大。和。の。國。に。石。棺。を。發。し。り。その。中。に。朽。る。骨。の。存。り。り。り。
脛。脚。の。骨。極。て。長。大。なり。尋。常。の。人。と。殊。異。なり。故。に。これ。大。古。の。長。髓。彦。を
埋。地。あり。その。骨。を。と。り。邑。の。名。の。人。の。名。と。なり。し。り。た。これ。も。如何
あ。ん。脛。骨。の。長。き。に。よ。り。名。を。得。たり。し。り。畢。竟。の。臆。想。の。説。を。れ。を。
今。小。在。て。い。つ。と。も。定。て。言。難。し。此。地。を。時。の。人。號。す。鷄。の。邑。の。い。り。を。
今。鳥。見。の。い。つ。と。も。定。て。言。難。し。長。髓。彦。と。孔。舍。衛。阪。の。戦。し。り。五。瀬
命。流。矢。中。て。薨。し。し。り。と。を。天。皇。の。深。く。御。心。不。銜。り。ち。た。し。て。憤。懣

御情を懐せしむ。此役必其仇を盡く誅究くこれを報んと欲す。御歌謠とす。其御歌。

瑞久米の子等。垣本に粟田ふら。氣韭一莖。其根之本。其根芽撃て。撃て止ん。○これ御歌の意。氣韭とく。臭氣のは。韭を長髓彦。兎根の憎べき。譬根の長髓彦。芽其黨類。譬長髓彦も黨類も。皆縦さす。漏さす。討滅盡て止ん。とあり。久米の子等も。同爾心得。よと勅を傳たまひ。此御歌。粟田の韭を詠せたまひ。皇師の倭入。多の虜ども。皆撃平けたまひ。年月を經。こころを。其間。殺をも種。とあり。粟田の旁。偶韭の一莖。生。出たるを。御覽。それを詠せたまひ。粟田の作。粟田の

御目み觸しを詠せしむ。何れも後の世の如く。殊更ふ粟田を設け。詠せしむ。ふら。とあり。

瑞久米の子等

瑞久米の子等。垣本に。植一莖。口響く。予に忘む。撃て止ん。○この御歌の意。この皇兄五瀬命。長髓彦の為。創傷を負。盡す。其を。慷慨たす。この莖を咬く。口の疼て。定まる。如く。其愁傷の今。忘難け。を撃殺さ。とあり。止ん。とあり。生。和名を。とあり。辛味の舌を。齧。とあり。齒。とあり。意。とあり。爾呼。とあり。

詠せしむ。軍卒御意を。遣入兵を。縦く。勵く。攻。とあり。

長髓彦軍兵や拒むるもえたるが長髓彦より行人を遣ふ。天皇小申す曰
嘗天神の子天の磐船に乗る天よを降止て坐す。その名を櫛玉饒速日命と
いふ。此命吾妹三炊屋媛を娶ふ。見息を生む。可美真手命といなり。吾への
饒速日命を君として奉てあり。そと天神の子豈兩種あらんや。奈何ぞ更り
天の神の子なりと稱ふ。人の地を奪んとするを吾心ふ推察する。必
定詐論なりんとぞ言せける。天皇の饒速日命のこころ。豫より知りしや。たると
わがが。るふその確たる證左を視んと欲し。それをその使ふ詔する。汝が君と
とら。果しは天神の子なり。必表の物あるが。そとを相示よとあり
けとを。使還るを其旨を述し。長髓彦も。饒速日命の天羽矢一隻と
歩鞞を以て天皇に示奉る。この羽々矢といふ。二羽を以て造る。矢あり。

長二尺五寸。こを彎くところの弓。長七尺五寸あり。つと大古の制あり。中世ハ三羽を用ふ。四羽を用く造りの。今上刺の鳴鏑小用と云ふ。歩鞞と云。歩人の帶と云ふところの鞞なり。天皇これに御覽し。事實より虚なきを。これを歸し。自御たす。ところの天の羽々矢一隻と。歩鞞と。長髓彦の使ふ示たす。長髓彦への天の表の物の。饒速日命の齋束一物と。殊絶て尊貴ことを詳し。頗踞踏を懐と雖。なや執拗褊心強し。顧慮ことなき。且凶器已小構。その勢中休。今よりい。猶迷圖を固守て復改んとする。意起ざり。饒速日命へ。本より天神の慇懃に。此豊葦原の中國を天孫授。まふ。定理あり。いとを明し。長髓彦み説示といふ。長髓彦の稟性。復根て。天道

の授と申ふところと。人の力を以て為と申ふ。大に相違ありて。私の智を以て
よく悟逆なることを知む。更にお受容る存尚やうりし。止とて得む。
長髓彦を殺す。天神の子なる。微信の瑞を將る。之を天皇にお獻盡く其衆
を率く。歸順する。天皇固より饒速日命の。天より降来し。こと知りし。
且その證左をも檢と申ひ。今も天の瑞物を獻る。飯頃し。その忠實の
志を褒寵たまひ。授るお神剣を以て。その勲勞に答たまひ。其子
可美真手命も。天の物部を率く。荒逆を翦平げ。海内を平定する。是を
股肱の職にお配。子孫にお傳く。長く治世の補佐とぞなり。此物
部氏の遠祖なり。物部は。武士の稱あり。萬葉集に。物部之布。物部
なども書く。武威勇猛のを呼て。爾のなる。我邦上古に。天皇を始

